富山大学　第二六号

富山大学学報

第26号　（昭和37年1月）

目　　次

関係法令……1
学内規程……1
総合情報……2
　薬学部長選挙……2
　学位取得者……2
日　　誌……2
特別寄稿……3
　大阪に卒業生を訪う　教育学部長　溝上茂夫……3
　ケンブリッジのある日　工学部教授　養田　実……3

関係法令

政　令

第8号　日本育英会法施行令の一部を改正する政令　37.1.23官報

省　令

文部第1号　文部省設置法施行規則の一部を改正する省令　37.1.6官報

〃　第2号　幼稚園設置基準の一部を改正する省令　37.1.31官報

規　則

人事院9－6　俸給の調整額の一部を改正する規則　37.1.26官報

〃　9－17　俸給の特別調整額の一部を改正する規則　37.1.26官報

〃　16－0　職員の災害補償の一部を改正する規則　37.1.26官報

官庁報告

文部省　昭和37年度国立大学学生募集要項　富山大学　37.1.18官報

学内規程

富山大学文理学部規程の一部改正

富山大学文理学部規程の一部を評議会の議を経て次のように改正する。

昭和37年1月26日　　富山大学長　横田嘉右衛門

第4条中「国文学及び中国文学」を「国文学」に改める。

付表中

「

	専攻科目	関連科目	自由選択科目　12単位
国文学及び中国文学専攻課程	○必修科目　44単位 国語学概論　2単位 国語学各論　2〃 国文学史　8〃 国文学各論　6〃 国語国文学演習　8〃 中国思想史　4〃 中国文学史　2〃 漢文講読　8〃 漢文演習　2〃 中国文学特殊講義　2〃 計　44単位	○必修科目　2単位 言語学概論　2単位 ○選択科目　10単位 次の科目のうちから選択する 国史概説　6単位 東洋史概説　4〃 西洋史概説　6〃 国史特殊講義　2〃 国史学演習　4〃 東洋史学演習　4〃 英語学講義　12〃 英語講読　20〃 英米文学講義　21〃 ドイツ語学講義　12〃 ドイツ語学講読　6〃 ドイツ文学講義　16〃 フランス語講読　2〃 考古学及び民族学　2〃 計　12単位	卒業論文　10単位
	合計　78単位		

」

を

「

	専攻科目		関連科目		自由選択科目	10単位
国文学専攻課程	○必修科目	46単位	○必修科目	2単位	卒業論文	10単位
	国語学概論	2単位	言語学概論	2単位		
	国語学特殊講義	4 〃	○選択科目	10単位		
	国文学史	8 〃	次の科目のうちから選択する			
	国文学特殊講義	8 〃	国史概説	4単位		
	国語学演習	2 〃	東洋史概説	2 〃		
	国文学演習	4 〃	西洋史概説	2 〃		
	国語学講読	2 〃	国史特殊講義及び演習	2 〃		
	国文学講読	2 〃	東洋史特殊講義及び演習	2 〃		
	中国思想史	2 〃	英文学専攻科目	2 〃		
	中国文学史	2 〃	ドイツ文学専攻科目	2 〃		
	漢文講読	4 〃	フランス語講読	2 〃		
	中国語講読	2 〃	考古学及び民族学	2 〃		
	漢文演習	2 〃				
	中国文学特殊講義	2 〃				
	計	46単位	計	12単位		
	合計	78単位				

」

に改める。

付表中「英文学専攻課程」及び「ドイツ文学専攻課程」の各関連科目の単位表中「国文学及び中国文学専攻科目」を「国文学専攻科目」に改める。

附則の次に次の附則を加える。

附　則（昭和37年1月26日改正）

この規程（改正）は昭和37年1月26日から実施し，昭和36年10月1日から適用する。ただし，適用日前から専門課程に在学中のものは従前の規定による。

総合情報

薬学部長選挙

横田薬学部長学長就任に伴なう後任薬学部長選挙は1月10日11時同学部で行なわれ，中沖太七郎教授が当選した。

学位取得者

取得者　文理学部教授　高瀬重雄
取得学位　文学博士
取得年月日　昭和37年1月18日（論文通過日）
学位論文　古代山岳信仰の史的考察
提出大学　京都大学
論文主査　教授　小葉田淳

日誌

本部

1月10日　後援会役員会（職員ホール）
　　学部長懇談会
11日　事務協議会
12日　認定講習委員会
13日　補導協議会
18日　共済組合地区大会準備委員会
19日　入試管理委員会
　　一般教育審議会
22～25日　共済組合監査（富山財務部）
25日　補導協議会
26日　評議会（第14回）

文理学部

1月8日　学部室内レクリエーション（かるた会）
13日　学部室内レクリエーション（囲碁，将棋）
17日　学部教授会
20日　寮卒業者送別会
24日　文学科文化部会
　　学部と寮生との懇談会
30日　全国文理学部長会議（於　埼玉大学）

教育学部

1月11日　昭和37年度編入学願書受付
12日　教務委員会
17日　補導委員会　教授会
22日　予算委員会
23日　教務委員会
　　昭和37年度編入学願書受付〆切

経済学部

1月8日　授業開始
　9日　人事教授会
　11日　教務委員会，教授会（第17回）
　16日　職業補導委員会
　22日　財務委員会
　25日　北陸経済研究所常任委員会，教授会（第18回）

薬学部

1月10日　薬学部長候補者選挙，教授会
　16日　中沖学部長発令
　17日　冬季休業終了，教授会
　18日　授業開始
　24日　教授会
　30日　特別研究発表に関する委員会

附属図書館

1月8日　文理学部分館移転について会計，施設の両課と打ち合せ会
　20日　県図書館協会理事会（県立図書館）
　24～25日　移転書架搬入

経営短期大学部

1月8日　入試問題作成委員会
　10日　〃
　16日　専任教官会議（第17回）
　27日　〃　（第18回）

特別寄稿

大阪に卒業生を訪う

教育学部長　溝上茂夫

教育学部の教官は富山県下の教員を養成しているつもりで教育し，学生ももとより県下の教職につくという目標の下に勉学に励んでいるはずである。しかし現実たるや極めて厳しく，たまたま求人があつたので，ここ数年間に8名の卒業生を北海道の教育界に送り，一昨年秋には私自らこれを訪れて補導激励し，また内と外，縦と横との連関をつけてきた。

昨35年度においては大阪府・市から求められて9名の卒業生（内1名は会社の心理学部門）を同地の教育界に送つた。その際1年以内には必ず私が訪問するからと約していたのであるが，今回学部教授会・職業補導委員会の議に基いてこれが実現したわけである。

私は厚生班主任の斉藤茂男事務官を同伴し，1月26・7の両日をこれにあてた。一同は西区靱中通1丁目5番地の近畿富山会館を会場として集り，私は富山大学・学部の近況について語り，卒業生たちはひとりひとり就職後今日に至るまでの経過，各自の持つている公私の問題，悩みについて卒直に述べあい，私は懇ろに助言し，活力を与えることにつとめたが，斉藤事務官は実に熱心に卒業生の指導に当つた。共通の問題は母校を遠く離れて友の少いこと，共通の悩みはいわゆる「学力調査」に関する動きの中にあつていかに身を処して行くかということであつた。これは若い教師にとつて深刻な精神的負担となつている。非常に元気づいてくれたので嬉かつた。また衷心自重を望む次第である。この会において，北日本新聞社大阪支社編集部長伊藤新太郎氏，会館業務部長金井直之氏の御好意にあづかつた。また大阪市教育委員会の給与課長増野大三郎氏および桐山克己氏の御好意に浴した。附属の父兄で大阪にも工場をもつておられる武内プレス工業株式会社社長武内宗八氏が卒業生全員を夕食にお招き下さつたことに対して深く感謝するものである。

大阪には三十幾名の大学卒業生がいる。今回の訪問で彼らの大阪における活動の基礎，母胎はできた。成否は継続的努力いかんにかかつている。

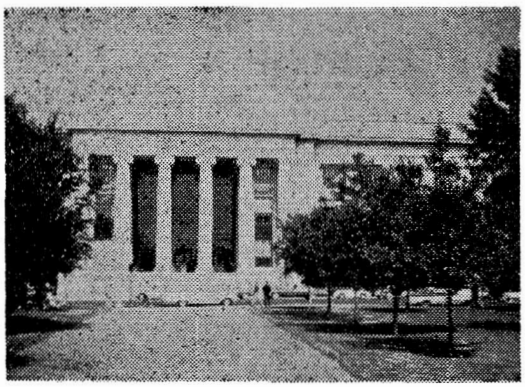
私は教育学部は富山県を中心として，その上に東京と大阪と北海道の三ケ所にはその活動進出の中心を持ち，これを育成すべきであるが，学部を超え，各学部の単位の上に大学全体の交り，更に広く県人先輩との交友の組織ができるようにと幻を描くものである。

ケンブリッジのある日

工学部教授　養田実

ケンブリッジといえばロンドンの近くにある昔から有名な Oxford と Cambridge のあのケンブリッジを連想するであろうが，ここでとりあげようとしているのはイギリスではなくてアメリカの話である。

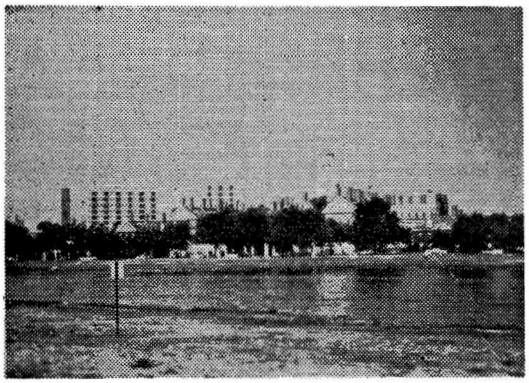
大西洋北岸の都会 Boston の隣の町が Cambridge であ



MITの玄関

る。これはまたアメリカの古い歴史を物語つている古都 Boston 及び Cambridge でもある。

更にまたこの Cambridge には世界的に著名な大学が二つある。一つは世界一の工科大学といわれている。Massachusetts Institute of Technology 即ち略称 M.I.T. として知られている大学で，もう一つの名門として名高いアメリカ最古の総合大学 Harvard University である。どちらも私立であるが日本で言えば東大級の難関でもある。M.I.T は世界の尖端をゆくその学問のレベルと優秀な設備と陣容とで日本にも広く紹介されている。Harvard も大きな



ハーバード大学遠景（手前はチャールス河）

なスケールで特に under graduate の全寮制度とその立派な寄宿舎の設備は到底日本では比較のしようがない。大きな素晴らしいビルがいくつも立ち並んでいてどれも学生寮だと聞かされては驚かない人は少いだろう。ここを卒業した日本人もかなりいる筈だ。特に最近出来た高層ビルの中の豪華版は Harvard の自慢の設備である。文科関係，博物館なども有名であるが工学方面も新しい大規模な設備が造られている。

M.I.T も Harvard も Boston の川を隔てた対岸にある。Boston もそれ程の大都会ではないが Cambridge は更にそれよりも小さな町である。

私は M.I.T の contact をとつてあつた先生に面会する予定の前日が日曜であつたので，留学生のK君と郊外ドライブに出かけることにした。彼の車は Ford だが痛ましいくらいにキズだらけである。ポンコツ屋にもつてゆくつもりだが替りが見つかるまでということで粘つて使つているのだが乗つていて恥しい程凹んだりゆがんだりしていて全くひどいものだ。それでもエンジンはどうにかかかるから乗り廻すにはまず問題はない。この車は彼の先輩のA君が日本に帰えるときに置いて行つたのを引き継いだものだ。

「暑いから海岸へ出たいな。出来ればケネデイーの別荘のある Hyannis に」と私が注文を出したら彼は Hyannis までは遠いからこの車では一寸自信がない。それにあそこはケネデイーが週末にきているとそこの住民以外は町の中に入れないことになつているのだが……と多少澁つたが私の要望が強かつたので，それではもう1台の車を管理しているので多分空いているだろうからと言つて彼の友人の下宿を尋ね廻つた。ところがあてにした車は別の男が既に乗つて出かけたあとだつたのでやむを得ず初めの車で行けるところまで行つてみることにした。

Boston の橋を渡つて美しい High way を東南に向つて突走る。彼等の生活の雑談をしながら走つていると間もなく海岸に着いた。Boston 湾反対側の海水浴場 Nantasket Beach である。

ナンタスケット海水浴場

道路の両側には木造に白ペンキ塗の海浜別荘がずらりと立ち並んでいる。脱衣場も鉄筋で仲々立派である。然しどことなく日本のような騒々しさがなくて閑静な感じだ。街を通り抜けて湾内の眺望のきく小高い丘の上まで乗り上げてそこで陽光を浴びながら休息した。

裸ん坊も少しはいたが大勢ではなかつた。この辺は Navy の膝元で今度の戦争では緊張したらしく砲台の跡も残つている。

戻りに丘から降りて次の目的地に走ろうとした頃車の調子がおかしくなつた。何か金属の当る音が聞えるのだがどこか分らない。途中でどうかなつたら厄介である。然しこの辺には修理工場は全くない。困つたことになつたが一策を考えてガソリンスタンドで診させることにした。

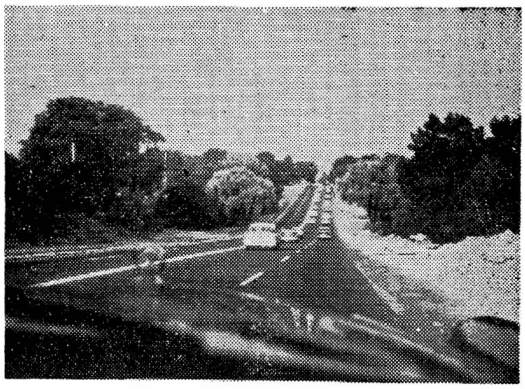
ようやく1個所探しあてることができた。ポパイのようなおやじが煙草のパイプをくわえながら中から出てきたので事情を話した。私の想像していた後車輪のキヤツプではなかろうかという話もつけ加えたらポパイ氏は早速あちこち点検しながら，やはりここだと云つていぢり廻しどうにか直してくれたらしい。金はいらないと云うから御礼にガソリンを入れてチツプを大きくはずんでおいた。

遠乗りでもあるしこの辺でトイレを使つておこうと思つて借りようとするとポパイ氏は私に向つてプレス，プレスと答えた。プレス（圧延）工場にでも行けという意味なのかと一瞬面喰つたが暫らくして please のつもりらしいことが分つたので奥に入つてお粗末な山小屋の共同施設のような所で用を足した。

さて愈々勇躍出かけようと暫らく走つているうちに再び妙な音が聞えて来た。さつぱり直つてはおらんようだ。これでは遠乗りはおぼつかない。残念だが別の車を探すために Cambridge に戻ろうとK君は自信を失つてもと来た道を帰えることにしてしまつた。

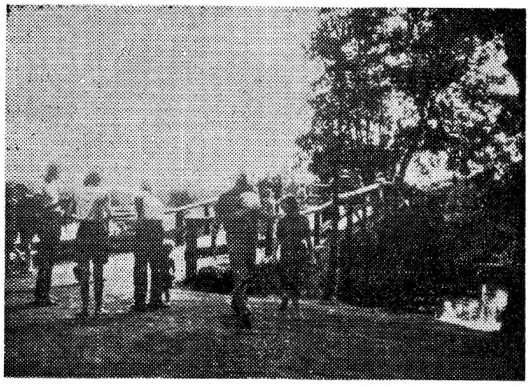
そして再び川を渡つて Cambridge の近くに着く頃にはど

うしたわけか音も聞えなくなつて車は頗る快調である。皮肉なものだ。こんなことならあのまま真直ぐ Hyannis に向つて走つてみればよかつたものをと2人で残念がつたことだが，もう時間も午後3時頃になつて今からそこへ出かけるには余りにも遅いと彼はボヤクので，相談の結果それ程遠くない Concord に行つてみることにした。海とは反対の方向である。Oak tree の原始林のようなところを一筋



ボストンよりコンコードに至る道

の舗装道路が延々と続いている。間もなく Concord に着いたが何も特別なところではなかつた。ここにはアメリカの有名な小説家 Hawthorne（その他 Emerson や Alcott なども）が住んでいた家がぽつんと一軒だけある。この家に観覧料を払つて他の観光客と混つて家具，調度品を見物してから100米程離れた Concord の橋を見に行つた。特別ど



コンコード橋

うということもない。巾10米程の沼川に木の橋がかかつているだけのことだ。橋の前後に石碑と銅像がある。ここがアメリカにとつて最も記念すべきイギリスとの独立戦争の火蓋が切られた場所だ。米英両軍がこのちつぽけな川とも云えぬような水溜りを挟んで対峙した状況を想像画の絵ハガキで売つていた。今から187年前のことだ。これからアメリカの歴史が始まる。何んと若い国であろう。2,000年近くの歴史の脈動を受け継いでいる我々日本と較べてなんと呆気ない歴史ではないか。彼等には古い文豪も少い。だから Hawthorne を大切に自慢にするわけだ。

それにしてもここは閑静そのものである。と云うよりも誠にまた呆気ない史蹟でもある。大げさな記念碑もなければ特別な建物もない。ただの田舎である。こんなところはどこにでもある。ここに来てアメリカの独立を想い厳粛な気持で襟を正させるような所でも何んでもない。

そうかと云つて俗化して観光みやげにあふれる盛り場とも全然違う。これが本当の史蹟なのだろう。その昔 Concord，Lexington の民兵達が結集して英国正規軍を撃退させたのはこの青々とした緑の草原だ。そしてこの Concord 川の水だ。今眼前にしている風景も187年前の姿もそのまま同じではないか。真の史蹟はこうでなければならない。

こんなことを感じながら oak tree の林の中の幾筋かの道を gear change の要らない自動式大型ボロ車のアクセルを踏んであてもなく，やたらと乗り廻し Cambridge に戻つた頃には日もとつぷりと暮れていた。

昭和37年3月1日
印刷者　安　倍　印　刷
T ② 5 1 5 0